# 教職員のいのちと健康を犠牲にするな

## 3月29日 怒りの対県教委人事交渉

2022年度末人事についての対県教委交渉が3月29日（水）、和歌山県民文化会館で行われました。県教委からは木下教員人事班長以下2名が出席し、和高教からの参加者は執行部含め42名が参加しました。

交渉の冒頭で県教委から人事異動の概況について説明があった後、参加者からの発言にもとづいて県教委を追及しました。

和歌山東高校の芸術科教諭が2校を兼務する転勤を命じられた問題については、多くの発言が集中しました。「『芸術科の教員は2校を兼務するのが当たり前だ』ということになれば、芸術科を志望する人がいなくなる」「教諭を配置したいと言いながら、これでは実質の定数減ではないか」「芸術科教育の質の確保という名のもとで、一人の教員のいのちと健康を犠牲にするつもりか」「昨年度末人事によって2校を兼務することになり多忙を極めた教員の声をどのように受けとめたのか」「このような労働条件の大幅な変更を、本人への事前連絡もなしに行うこと自体が問題だ」「内示撤回しかない！」

「定数確保」と言いながら、教員を増やすことをせず、現場の教員を犠牲にする人事への怒りが会場全体に充満しました。県教委は「当該教員の負担をできるかぎり軽減するよう校長に話をする」とは回答したものの、内示を撤回しませんでした。

他にも「分会役員の異動」「休職管理職の代替者不補充」「職業科実習教員の減員」「2年間で部長・主任を含む教職員の半分以上が異動」「任用が継続されない講師への不誠実な対応」等、参加者の発言によって多くの問題が浮き彫りになりました。

県教委は「質の高い教育」を学校現場に求めますが、そのためには一人ひとりの教職員が十分に力を発揮できる労働環境を実現する人事と定数増が不可欠です。今、教職員が減っていく中での人事・定数面でのしわ寄せが深刻化しています。これからも、人事を「個人の問題」に矮小化させず、団結を強めましょう。和高教は絶対に泣き寝入りはしません。

和高教

発行所
和歌山県高等学校教職員組合
和歌山市雑賀屋町東ノ丁50
TEL 073-432-6355
FAX 073-432-6357
Eメールアドレス
w-koukyoso@imageocn.ne.jp

2023年4月号
一面　人事定数交渉　退任役員挨拶
二面　退任役員挨拶

2023年度スタートです。和高教情宣部では、今年も紙面のより一層の充実を図っていきます。組合員の皆様の記事投稿（メールにて）をよろしくお願いいたします。

# 2022年度 退任役員挨拶 和高教 発展に ご尽力くださり ありがとうございました

## 和高教の一員であったことが大きな財産

執行委員長　東山 邦夫

執行委員長を退任しました東山です。在任中、多くの組合員諸氏から叱咤激励やご指導ご鞭撻をいただき心から感謝します。和高教運動にもっと貢献できればと思っていましたが、力量不足で大してお役にも立てず申し訳なく感じています。

故天野・故川端両委員長をはじめ既に鬼籍に入った方々も多くおられますが、退任するにあたり、諸先輩方が逆境の中で頑張られたことの凄さを改めて痛感しています。

私は、1980年に古座高校で和高教に加入しました。82年から和歌山北高校、91年から粉河高校、2000年から和歌山東高校、07年から和歌山高校で勤務しました。この間、青年部・分会・支部・本部で役員をやらせていただきました。ノンポリであった私ですが、役員をやることで多くを学び、行動にもつながったと考えています。

組合関係者だけでなく、多くの方々と知り合えたことが大きな財産となりました。

皆さんと議論や行動をするなかで、教員として人間として成長させていただきました。和高教の一員であったことを本当に幸運に思っています。古座高校で声をかけていただいた先輩方に改めて御礼を申し上げます。微力ですが、今後とも、和高教運動に関わっていければと思いますのでよろしくお願いします。

## バソコンから解放され人間らしい生活に

執行副委員長　坂田 祐二

再任用任期満了にともない、8年間の本部役員を退任させていただきます。教員生活を振り返ると、数教協活動と部活動と組合活動に明け暮れた43年間でした。

経産省の策略で、教育の世界でもずいぶんとICT化が進みました。携帯電話も持たず、試験問題も手書きで押し通したアナログ人間の私にとって、机上の校務パソコンの画面とにらめっこするのが苦痛の毎日でした。職場のみんながスマホを使ってアンケートに答えているときでも、一人だけ

## 鷹の目

24万4940人で過去最多となった全国小中学校の不登校者数（2021年度）。それに対し中教審は、「不登校特例校」を5年後までにすべての都道府県や政令指定都市に設置し、将来的には全国で300校設置することを目指すと答申した。この「不登校特例校」とはどのようなものなのか。先駆けといわれる八王子市の高尾山学園について調べてみた。▼高尾山学園では設立時から2割程度の時数軽減を行うなど、独自の教育課程を編成している。また、学生サポーターや臨床心理士、SSWを含め、総勢約100人の大人がおり、子どもたちは誰かに話を聞いてもらえる環境になっている。校長の黒沢正明さんはインタビューに対し、「時間はかかりますが、うちに来ると多くの子が元気になるんです。それは、信頼できる友達や大人ができて、勉強が大切だと自らわかるようになるから」「本校のような教育がほかの学校でも行われれば、不登校は減ると思います」▼これは不登校特例校だけでなく、すべての学校で実現すべき姿ではないか。こどものいる現場中心の教育を、管理と競争の教育へと変質させてきた教育行政が、また小手先の対応をしているのだという感が拭い得ない。▼「こども家庭庁の政策は選挙のためのアピールだという一時的なものではなく、私達が大人になるまでずっと続くものですか」「多子若齢化が進んだら、子どもは貴重な存在ではなくなってしまうのでしょうか」こども家庭庁の記者会見で、担当相に対することも記者の質問は、そんな教育行政の胡散臭さを鋭く感じ取っている。

# 役員退任あいさつ（つづき）

紙ベースのアンケート用紙を渡され、ICT難民の扱いを受けていた私ですが、唯一の楽しみは、授業に自作のアナログ教具を持ち込み、生徒を驚かせることでした。ようやくコンピュータから解放され、人間らしい生活に戻れるような気がします。

退任しても、数学教育・部活動・和高教運動には、微力ながら関わっていきたいと思います。よろしくお願いします。

## オルグで聞く生の声 貴重で新鮮なもの

書記次長　都築　朋大

まずは和高教組合員の皆様および笠田分会の方々に感謝申し上げます。なんとか5年間、全力とは言えませんが疾走することができました。

全ては2017年10月末、高校会館の一階で発した「お受けします」の返答から始まりました。「専従は3日したらやめられん」と先輩方から聞かされましたが、私は3日目で学校が恋しくなってしまい、その心境に達することができませんでした。今更ながら自分には大役すぎて、皆様のお役に立てなかったことを痛感しています。

この5年間で人の喜怒哀楽・優しさ・思いやり・冷徹・薄情……と、いろいろな方々の感情を間近で垣間見ることができました。これは本当に貴重な経験でした。また、自分が一番大事にしたのは、年2回行われる「職場オルグ」でした。職場で聞く生の声は、支部長・分会長会議や本部委員会などとまた違う貴重で新鮮なものでした。また、とりわけ印象に残っていることは、教育職1級職員の賃金改善と、臨時的任用職員の年休繰越の実現です。まさしくこれらは「雨だれ石を穿つ」言い続けることの大事さを示しています。

改めて学んだことは、①言っても仕方がないことでも言わなければ何も動かないこと。②権利や制度は与えられるものではなく勝ち取っていくものだということ。③権力者の最大の恐怖は弱者の団結だということ。この学びを4月からの学校現場で、そして支部活動に活かしていく所存です。

私にとっての餞（はなむけ）は、司書部教研で作った廃材プローチと変わり絵、実習教員部学習会で作成したムードライトです。これらは大事に家に持って帰ります。4月からは第一支部書記長という大役が続きますが、毎日これらを眺めながら頑張りたいと思います。

末筆ながら、5年間の専従生活を支えていただいた村上・石田両書記にお礼申し上げます。

## あたたかく送り出してくれた分会に感謝

常任執行委員　鈴木　裕子

常任執行委員としては、6月頃からのスタートで、役務など十分にお手伝いできず、申し訳ありませんでした。オルグに行っても何も答えられず「弁当泥棒」の罪を負って帰るという有様でした。どこの分会でもあたたかく迎えてくださり、ありがとうございました。星林分会からも、あたたかく送り出してくださり、ありがとうございました。

この1年、働き方改革や賃上げなど、労働条件や環境が見直されるようになってきましたが、働きやすい職場を作るためには、まず、誰彼違わず向き合うことだと思い返しました。職場でいろいろな人の声を聞こうと思っていたけれど、実際にはなかなか肝心なことを聞けなかったり、組合加入の声かけをきちんとできずに終わってしまったり、モヤモヤしています。青年部アンケートで声をかけられていない人が半分以上もいたという記事がありましたが、さもありなんです。次はもう少し頑張ります。

また一つ、風穴が開いた瞬間に立ち会い、感動しました。委員長をはじめとした本部の皆様や女性部役員の仲間に助けていただき、大役を終えることができました。ありがとうございました。また、司書部での経験が豊かな湯峯先生（司書部の先生方にもご協力いただきありがとうございました）と支え合えたこと、幸せに思っています。本当にありがとうございました。

# 専門部長 退任あいさつ

## 19年間お世話になりました

事務職員部長　中川　真左樹

お疲れ様です。この春まで事務職員部長でした中川です。

組合に関わり、長い間部長をやっていたように思いますが、数えてみると部長の期間自体は短かったですね。その間、事務職員の組合員も増やせない情けない部長でしたが、全国や近畿の事務職員の方々との交流は私の財産です。

まあ半分くらいは管理職になりたくない思いで部長をやってたんですが、意味はなかったですかね。（笑）

冗談はさておき、19年間組合員として様々な先生にいろいろとお世話になりました。本当にありがとうございます。

皆様、今後お目にかかったときには『管理職は敵だ！』と石を投げないようによろしくお願いします。

お世話になりました。ありがとうございました。失礼します。

## 風穴を開けた「先読み加配」

女性部長　井端　恵理

県女性部長退任と同時に退職となります。先輩方のたゆまぬ努力の賜物である数々の権利に守られ、安心して今日まで勤めることができたと実感しています。

8月の対県交渉で、力強く、粘り強く食い下がる委員長の姿を目の当たりにし、12月の確定交渉で、その時の要求の柱であった「先読み加配」が小中学校で実現する運びとなりました。母性を守る権利獲得のために、役員の先生方や本部の先生方のおかげで1年を終えることができました。ありがとうございました。

多忙の中、女性部総会や対県交渉、女性部長会議、学習会に多くの先生方に参加していただきました。そして毎年実施している女性部アンケートにも協力していただき、ありがとうございました。女性部アンケート集計も本部で引き受けてくださり感謝しております。このアンケートはとても貴重だと思います。アンケート結果の数字から多くのことが見えてくるように思います。女性が抱える問題は多岐にわたります。つぶやきのようなひとつひとつの小さな声を大切にして反映していくことで、よりいっそう女性が働きやすくて仕事を続けやすい環境になると思います。ゆるっとほわっとこれからも女性部の活動が続くことを願っています。

## つぶやきのような小さな声を大切に

女性部長　湯峯　登詩

## 多くの方とつながり成長

実習教員部長　矢高　沙織

昨年度、粉河分会の鳥本先生と共に1年間実習教員部長を務めさせていただきました。初めての部長でとても不安でしたが、本部の先生方はじめ実習教員部の先生方に支えていただき、なんとか1年終えることができ、大変勉強になりました。

昨年度は対面とオンラインのハイブリッドで総会を行ったり、講師の先生を招いて研修会を行ったりすることができ、徐々に以前の状態に戻ってきている中、コロナ禍で定着したオンラインによる会議や情報共有もうまく利用することで、先生方とつながりをもって活動させていただきました。これからも多くの先生方とつながりをもち続け、成長し、活動していきたいと思います。一年間、ありがとうございました。

## 楽しく充実した司書部活動

司書部長　森　由美子

着任の挨拶をしたのがつい先日のような気がしますが、本部の先生方、司書部の皆様、他の役員の方々に支え助けていただき、一年間司書部長を務めることが出来ました。ありがとうございました。

2022年度から役員数が4人から1名減り3人となりました。ひとり少なくなるだけで、役員会を開くたび部屋が広く寂しく感じました。少人数だからこそひとりの大切さが身にしみました。仲間を増やすことは出来ませんでしたが、司書部教研では少人数だからこそ皆さんと対面で多くの情報交換をすることが出来ました。これからも教研をはじめ楽しく充実した活動を続けることができるよう一丸となって頑張りたいと思います。これからも司書部をよろしくお願いいたします。